

第 40 回 日本受精着床学会総会・学術講演会

0-127

東京, 2022.7.28-29

凍結検体の管理システムの最適化を目指して

佐藤学^{1,2} 中岡義晴¹ 森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

目的

胚、精子、卵子の凍結検体を保管が現在の ART では標準となり、生じるのは保管検体の管理である。この作業は培養士や事務員など担当することが多く施設によりさまざまに業務負担は大きい。当院での凍結保存システムの現状を踏まえてどのようなシステムを構築することが患者と ART 施設双方でメリットが高いのかを考える。

方法

当院では患者から保管更新または廃棄の連絡を受けて作業をしてきたが、①2021 年より SMAPS[®] (富士ソフト) を導入し、SMS を用いて期限事前通知、更新または廃棄の意思表示、更新の場合の料金クレジット決済を患者スマートフォンの操作により行えるシステムを導入した。そのほかに②来院して窓口で意思表示と決済、③当院ホームページから意思表示、振込入金、④連絡を受け郵送にて振込先案内のいずれかの方法で患者との連絡、決済を行っている。

結果

昨年の凍結検体の更新または廃棄連絡の手段として①の割合が最も多かった。SMAPS[®] 導入による事前通知で患者自身が期限把握と連絡義務を自己管理する必要性は緩和され、期限前に更新または廃棄の意思確認と決済が進む割合は高まった。

考察

SMAPS[®] は SMS 機能を使って行うことが前提で携帯番号が把握できれば通知可能なことはメリットだが SMS 契約がない場合や、海外在住の場合は通知不能であるので全患者が利用できるシステムではない。一方で患者にとっては来院なしでスマートフォンだけで手続きが完結できることはコロナ禍もあってメリットは高い。SMAPS[®] のようなシステムは特に膨大な凍結検体を有する施設では効果は高いかもしれない。ただし保険治療の場合は診察が必要と想定していて、メリットは薄まり自費治療の患者サービス一環としての位置づけになってしまう。また、複数システムによる煩雑さとシステムリテラシーが必要で作業スタッフにはデメリットである。作業スタッフ側の最適化が今後必要であると考えている。